

京大の発想力 未来に

附置研シンポ 最先端の研究披露

金沢市の石川県文教会館で11日に開かれた京都大附置研究所・センターの第12回シンポジウム「京都からの挑戦―地球社会の調和ある共存に向けて―」（読売新聞社など後援）。様々な分野の第一線で活躍する研究者が、最先端の研究成果や考え方を披露し、地元の高校生ら約600人が熱心に耳を傾けた。

冒頭、山極寿一学長が「学者たちの自由な発想、広大な精神世界を目的の当たりにしてほしい」とあいさつ。続いて同大学の研究者7人が順に登壇した。

トップバッターの伊勢武史・フィールド科学教育研究センター准教授は、森が人間に与える影響について



様々な研究成果が披露された京都大附置研究所・センターのシンポジウム（金沢市で）

脳波を計測する実験などを
行っており、森について「癒
やしや「不気味」など様々
な感情を味わせる「アミ
ューズメントパーク」と表現。
「森から宗教が生まれたと
の仮説も立てられるのでは
ないか」と自説を述べた。

ミヤンマーの研究に取り
組む中西嘉宏・東南アジア
地域研究研究所准教授は、

2007年に取材中の日本
人ジャーナリストが射殺さ
れた反政府デモについて解
説。デモ拡大の背景には
僧侶の参加があり、鎮圧に
は地方出身の貧しい兵士が
あたっていたとした上で、
「民衆を抑圧する強大な軍
事政権という善悪の見方
は本質を捉えられない。多
角的な分析が必要だ」と述

べた。
パネル討論では、山極学
長ら6人が、新しい研究分
野の開拓に取り組む京都大
の未踏科学研究ユニットの
あり方について意見を交わ
した。
県立金沢桜丘高1年、向
川裕樹さん(16)は「京大は
壁が高い印象だったが、高
校生でもわかりやすく、ひ
きこまれた。京大で学ぶと、
人間の幅も広がろう」と
満足そうに話した。